

言語聴覚学科

シラバスの変更一覧

学年	ページ	開講科目
1年	10	日本語表現法
1年	18	医療概論
1年	34～35	失語症概論
1年	37	学習障害・発達障害
1年	38	運動障害性構音障害 I
1年	39	摂食嚥下障害 I
1年	41	聴力検査 I
1年	45	言語聴覚障害学の基礎
2年	62	心理測定法
2年	64	聴覚心理学
2年	68～69	失語症・高次脳機能障害 II
2年	70～71	言語発達障害 II
2年	75～76	運動障害性構音障害 II
2年	78～79	摂食嚥下障害 II

学修成果	1	2	3	4	5	科目ナンバリング				
	基礎力	実践力	人間関係力	生涯学習力	地域理解力	CO-0-HCU-01				
	●		●							
科目名	日本語表現法				単位認定者	吉田 理		試験(筆記)	30 %	
対象学科 必修・選択 配当年次	言語聴覚学科	必修	1年	開講時期	前期	単位数	1 単位	評価の方法	授業内課題(課題文1)	20 %
					授業形態	演習	授業時間数		30 時間	授業内課題(課題文2)
				授業回数		15 回	受講態度		20 %	
授業の概要	書き言葉と話し言葉における日本語運用の基本を学び、論理的なコミュニケーションの手段である言語表現を効果的に表現する基礎能力を養う。まず日本語の特徴的な知識について学び、日本語運用の基本を身につける。その上で、書き言葉・話し言葉等のさまざまな表現行為に触れ、自らも表現し、相手に伝わる表現について実践的理解を深める。具体的な場面での適切な表現方法を実際に考えることで、大学や社会で必要となる日本語表現のさまざまなスキルを獲得することを旨とする。									
到達目標	自分の考えを適切な言葉で表現・伝達できる力を身につけることを目標とする。具体的には、 ・相手が発するメッセージを受け止めながら、場面に応じた意思の表現・伝達ができるようになる。 ・目的に合わせた文章(文書)作成ができるようになる。									
学修者への期待等	日本語に興味を持ち、自分の身の回り(周り)で使われている「ことば」に敏感になること。授業をその都度理解し、疑問な点はすぐに解決できるよう集中して受講のこと。問題演習を通して日本語力(語彙力)を身につけていきましょう。なお、単位認定試験についてはマークシート式による実施を予定している。									
回	授業計画				準備学修					
1	「日本語表現法」ガイダンス(日本語とは何か)				当日の新聞や雑誌(漫画を除く)に目を通し、印象に残る表現があれば心に留めておくこと。(概ね30分)					
2	日本文の概要1:現代文の成り立ち [テキスト言葉と表現編]				当日の新聞や雑誌(漫画を除く)に目を通し、印象に残る表現があれば心に留めておくこと。(概ね30分)					
3	日本文の概要2:古典文法(漢文、古文) [テキスト言葉と表現編 1.文法(1)古典文法]				当日の新聞や雑誌(漫画を除く)に目を通し、印象に残る表現があれば心に留めておくこと。(概ね30分)					
4	日本文の概要3:現代文法 [テキスト言葉と表現編 1.文法(2)口語文法]				当日の新聞や雑誌(漫画を除く)に目を通し、印象に残る表現があれば心に留めておくこと。(概ね30分)					
5	日本文の概要4:現代文法つづき(品詞分類) [テキスト言葉と表現編 1.文法(2)口語文法]				当日の新聞や雑誌(漫画を除く)に目を通し、印象に残る表現があれば心に留めておくこと。(概ね30分)					
6	現代文の修辞:原稿用紙の使い方など [テキスト言葉と表現編 4.表現(4)] 実践1:課題文を書く(400字)…主題は当日指示				当日の新聞や雑誌(漫画を除く)に目を通し、印象に残る表現があれば心に留めておくこと。(概ね30分)					
7	実践1の添削指導 語彙1:辞書語彙…漢字と対義語・類義語				当日の新聞や雑誌(漫画を除く)に目を通し、印象に残る表現があれば心に留めておくこと。(概ね30分)					
8	現代文の修辞:表記法(句読点、現代仮名遣い、送り仮名) [テキスト言葉と表現編 4.表現(2)]				当日の新聞や雑誌(漫画を除く)に目を通し、印象に残る表現があれば心に留めておくこと。(概ね30分)					
9	文章の作成1:公用文作成の考え方				当日の新聞や雑誌(漫画を除く)に目を通し、印象に残る表現があれば心に留めておくこと。(概ね30分)					
10	文章の作成2:文章作成の基本 [テキスト言葉と表現編 4.表現(5)]				当日の新聞や雑誌(漫画を除く)に目を通し、印象に残る表現があれば心に留めておくこと。(概ね30分)					
11	文章の作成2:実用文の作成 [テキスト言葉と表現編 4.表現(5)]				当日の新聞や雑誌(漫画を除く)に目を通し、印象に残る表現があれば心に留めておくこと。(概ね30分)					
12	敬語1:種類と働き、尊敬語と謙譲語 [テキスト言葉と表現編 4.表現(12)]				当日の新聞や雑誌(漫画を除く)に目を通し、印象に残る表現があれば心に留めておくこと。(概ね30分)					
13	800字作成要領 実践2:課題文を書く(800字)…主題は当日指示				当日の新聞や雑誌(漫画を除く)に目を通し、印象に残る表現があれば心に留めておくこと。(概ね30分)					
14	実践2の添削指導 敬語2:謙譲語と丁寧語 [テキスト言葉と表現編 4.表現(12)]				当日の新聞や雑誌(漫画を除く)に目を通し、印象に残る表現があれば心に留めておくこと。(概ね30分)					
15	実践2の添削指導 語彙2:辞書語彙…その他(ことわざ・四字熟語・慣用句)、語彙3:新聞語彙 定期試験説明				当日の新聞や雑誌(漫画を除く)に目を通し、印象に残る表現があれば心に留めておくこと。(概ね30分)					
教科書	『原色シグマ新国語便覧 ビジュアル資料 増補三訂版(シグマベスト)』 国語教育プロジェクト編著、文英堂									
参考文献	「社会人のためのビジュアルカラー国語百科」大修館書店編集部、大修館書店									
備考	進捗状況や理解度に応じ、順序や内容を変更する場合がある。また適宜テキストの文学史の部分にも触れていく。 授業内課題である課題文(含事後指導)計2種は、単位認定の必須事項として成績に加える(未提出・不参加は認定しない)。受講態度は、出席状況のほか、私語・飲食・電子機器操作・居眠りの禁止等を想定している。なお、受講ノートとして大学ノートを用意すること(試験は持ち込み可とするが、コピー用紙の切り貼りやルーブリーフ等は認めない)。 また、何らかの事情でオンデマンド講義に切り替わった場合には、試験を中止し課題文のみで評価することもあり得るので心得ておくこと。 課題やレポートについては、次回の授業内で解説指導を行なう。									

※以下は該当者のみ記載する。

実務経験を有する教員による授業科目(実務経験の概要、実務経験と授業科目との関連性)

--

学修成果	1	2	3	4	5	科目ナンバリング				
	基礎力	実践力	人間関係力	生涯学習力	地域理解力	ST-1-HDT-01				
	●	●		●						
科目名	医療概論				単位 認定者	櫻庭 ゆかり 渡邊 弘人 江畑 綾		試験(筆記)	70 %	
対象学科 必修・選択 配当年次	言語聴覚学科	必修	1年	開講時期	前期	単位数	1 単位	評価の方法	受講態度	30 %
					授業形態	講義	授業時間数		30 時間	
				授業回数		15 回				
授業の概要	医療とは人間の健康の維持や回復、増進を目的とした諸活動を指す。疾病に対する医学を包含し、保健、福祉を含む。本講義では言語聴覚士として医療に従事するにあたり、多職種との協働をかなえるために、病気と医療の歴史、医療行為の概念を含む臨床医学の基礎、健康状態と社会環境、予防医療、感染症対策、人口・保健統計、医療倫理など医療の概要を学ぶ。									
到達目標	医学・医療に関して具体的にふれることにより、専門を学ぶ学習意欲を高めるとともに、将来の基礎を築く。									
学修者への期待等	医療、リハビリテーションに関することについて、自分の具体的なイメージを作り理解を深めていくことを期待します。									
回	授業計画				準備学修			担当		
1	健康の概念、生活機能と障害				関連書籍を読んで講義に臨むこと (1時間程度)			櫻庭 ゆかり		
2	リハビリテーションとQOL				関連書籍を読んで講義に臨むこと (1時間程度)			櫻庭 ゆかり		
3	ノーマライゼーションとインクルージョン				関連書籍を読んで講義に臨むこと (1時間程度)			櫻庭 ゆかり		
4	医の倫理と臨床倫理				関連書籍を読んで講義に臨むこと (1時間程度)			櫻庭 ゆかり		
5	生命倫理と研究倫理 専門職倫理と守秘義務 個人情報保護				関連書籍を読んで講義に臨むこと (1時間程度)			櫻庭 ゆかり		
6	診療補助行為、チーム医療・多職種連携とは 適宜グループワークを実施する				関連書籍を読んで講義に臨むこと (1時間程度)			渡邊 弘人		
7	地域医療・介護連携と地域包括ケア 医療安全根拠に基づく医療 適宜グループワークを実施する				関連書籍を読んで講義に臨むこと (1時間程度)			渡邊 弘人		
8	人口統計 保健統計 適宜グループワークを実施する				関連書籍を読んで講義に臨むこと (1時間程度)			渡邊 弘人		
9	疫学とは 適宜グループワークを実施する				関連書籍を読んで講義に臨むこと (1時間程度)			渡邊 弘人		
10	健康管理と予防医学 適宜グループワークを実施する				関連書籍を読んで講義に臨むこと (1時間程度)			渡邊 弘人		
11	母子保健とは (グループワーク)				本時で取り扱った内容について復習をすること (概ね1時間)。			江畑 綾		
12	成人・老人保健とは (グループワーク)				本時で取り扱った内容について復習をすること (概ね1時間)。			江畑 綾		
13	精神保健				本時で取り扱った内容について復習をすること (概ね1時間)。			江畑 綾		
14	感染症対策				本時で取り扱った内容について復習をすること (概ね1時間)。			江畑 綾		
15	環境保健				本時で取り扱った内容について復習をすること (概ね1時間)。			江畑 綾		
教科書	特になし。講義毎に資料を配布。									
参考文献	『言語聴覚士テキスト (第4版)』 大森孝一他 編著 医歯薬出版									
備考	授業課題は、採点後に返却し、フィードバックを行う。									

※以下は該当者のみ記載する。

実務経験を有する教員による授業科目(実務経験の概要、実務経験と授業科目との関連性)

言語聴覚士として、臨床現場にて20年以上の経験あり。

学修成果	1	2	3	4	5	科目ナンバリング				
	基礎力	実践力	人間関係力	生涯学習力	地域理解力	ST-2-AHB-01				
	●	●		●						
科目名	失語症概論				単位認定者	中川 大介		試験(筆記・レポート)	80 %	
対象学科 必修・選択 配当年次	言語聴覚学科	必修	1年	開講時期	通年	単位数	2 単位	評価の方法	授業内課題等	10 %
						授業時間数	60 時間		受講態度	10 %
				授業形態	講義	授業回数	30 回			
授業の概要	失語症領域における言語聴覚士にとって必須の事項を理解する。19世紀後半に端を発する失語症候学の歴史を概観し、現在もなお現場で広く用いられている古典分類の考え方について知識を習得する。失語症の諸症状、失語学の歴史及び新古典分類の各失語症タイプ分類の仕方、症状の特徴、病巣について画像を読み解きながら学ぶ。また、特殊な失語型、純粹例や、失語症の言語治療の原則とその様々な治療方法、さらには失語症の回復と地域とのつながり、失語症友の会活動についても学んでゆく。									
到達目標	失語症の基本的な知識を身に付け、失語症者への理解を深める。併せて国家試験必須事項を理解する									
学修者への期待等	教科書だけではなく、様々な関係図書にあたり学修することを望む									
回	授業計画				準備学修					
1	言語と脳、失語症の定義				教科書第1章失語症の定義、第2章言語と脳 1言語の構造を読んでおくこと (30分程度)					
2	言語の神経学的基盤 (左右の半球と脳梁等)				教科書第2章2ABCDを読んでおくこと (30分程度)					
3	言語の神経学的基盤 (その他の言語関連領域)				教科書第2章2EFを読んでおくこと (30分程度)					
4	失語症の原因疾患				教科書第3章失語症の原因疾患を読んでおくこと (30分程度)					
5	失語症の症状 (話す、聴くを中心に行う) 適宜ディスカッションを行う				教科書第4章該当箇所を読んでおくこと (30分程度)					
6	失語症の症状 (読む、書く、計算を中心に行う) 適宜ディスカッションを行う				教科書第4章該当箇所を読んでおくこと (30分程度)					
7	失語症の症状 (近縁症状、随伴しやすい障害)				教科書第4章失語症の症状 近縁症状、随伴しやすい症状を読んでおくこと (30分程度)					
8	失語症候群 (症候群の成り立ち、ブローカ失語)				教科書第5章失語症候群 症候群の成り立ち、ブローカ失語を読んでおくこと (30分程度)					
9	失語症候群 (ウェルニッケ失語)				教科書第5章失語症候群 ウェルニッケ失語を読んでおくこと (30分程度)					
10	失語症候群 (伝導失語、健忘失語) (適宜グループワーク実施)				教科書第5章失語症候群 伝導失語、健忘失語を読んでおくこと (30分程度)					
11	失語症候群 (超皮質性失語、全失語)				教科書第5章失語症候群 超皮質性失語、全失語を読んでおくこと (30分程度)					
12	失語症候群 (交叉性失語、皮質下性失語) (適宜グループワーク実施)				教科書第5章失語症候群 交叉性失語、皮質下性失語を読んでおくこと (30分程度)					
13	純粹型 (純粹語聾)				教科書5章失語症候群 純粹語聾を読んでおくこと (30分程度)					
14	純粹型 (発語失行)				教科書第5章失語症候群 発語失行を読んでおくこと (30分程度)					
15	純粹型 (純粹失読)				教科書第5章失語症候群 純粹失読を読んでおくこと (30分程度)					

回	授業計画	準備学修
16	純粹型（純粹失書）	教科書第5章失語症候群 純粹失書を読んでおくこと（30分程度）
17	純粹型（失読失書、小児失語）（適宜グループワーク実施）	教科書第5章失語症候群失読失書、小児失語を読んでおくこと（30分程度）
18	原発性進行性失語（適宜グループワーク実施）	教科書第5章 原発性進行性失語を読んでおくこと（30分程度）
19	失語症の言語療法の全体像（適宜グループワーク実施）	教科書第6章を読んでおくこと（30分程度）
20	失語症の評価・診断と情報収集（適宜グループワーク実施）	教科書第7章の該当箇所を読んでおくこと（30分程度）
21	情報の統合と評価のまとめ、鑑別診断（適宜グループワーク）	教科書第7章の該当箇所を読んでおくこと（30分程度）
22	失語症の回復過程（適宜グループワーク）	教科書第8章失語症の回復過程を読んでおくこと（30分程度）
23	言語治療の基本原則（適宜グループワーク）	教科書第9章言語治療の基本原則を読んでおくこと（30分程度）
24	言語治療の理論と技法（刺激法，行動変容法等）適宜グループワーク	教科書第9章言語治療の理論と技法の該当箇所を読んでおくこと（30分程度）
25	言語治療の理論と技法（認知神経心理学的アプローチ，社会的アプローチ等）	教科書第9章言語治療の理論と技法の該当箇所を読んでおくこと（30分程度）
26	急性期の評価・訓練・支援（適宜グループワーク）	教科書第10章の該当箇所を読んでおくこと（30分程度）
27	機能回復訓練（適宜グループワーク）	教科書第10章の該当箇所を読んでおくこと（30分程度）
28	活動・参加訓練（適宜グループワーク）	教科書第10章の該当箇所を読んでおくこと（30分程度）
29	生活適応期の訓練・支援，社会復帰，地域活動	教科書第10章の該当箇所を読んでおくこと（30分程度）
30	失語症研究の歴史（適宜グループワーク）	教科書第11章失語症の歴史を読んでおくこと
教科書	『標準言語聴覚障害学 失語症学（第3版）』藤田 郁代 編 医学書院 『病気がみえるvol.7 脳・神経（第2版）』医療情報科学研究所 編 メディックメディア 『2026年版言語聴覚士国家試験過去問題3年間の解答と解説』大揚社 2025年7月頃発売予定	
参考文献		
備考	適宜グループワークを行う。講義内で小テストを適宜行う（講義内課題） 課題やレポートがある場合は、次回の授業内でフィードバックする。	

※以下は該当者のみ記載する。

実務経験を有する教員による授業科目（実務経験の概要、実務経験と授業科目との関連性）

言語聴覚士として、臨床現場にて15年以上の経験あり

学修成果	1	2	3	4	5	科目ナンバリング				
	基礎力	実践力	人間関係力	生涯学習力	地域理解力	ST-2-LDS-05				
	●	●		●	●					
科目名	学習障害・発達障害				単位認定者	小松 有希 須賀川 芳夫		試験(筆記)	70 %	
対象学科 必修・選択 配当年次	言語聴覚学科	必修	1年	開講時期	後期	単位数	1 単位	評価の方法	受講態度	30 %
					授業形態	講義	授業時間数		30 時間	
				授業回数		15 回				
授業の概要	本講義では、学習障害・発達障害の歴史的背景、診断基準、支援の基本的な考え方を学修する。主に発達障害についての概観、知的発達障害・自閉性障害・学習障害・読み書き障害、算数障害、注意欠陥/多動性障害(AD/HD)について取り上げ、それぞれの障害について理解を深める。また、臨床に必要な幼児の発達の基礎、言葉の育ちについて学び、幼児支援に対するアセスメントについて講義を通して学び、支援方法を身につける。									
到達目標	学習障害及び発達障害の定義や特性、支援の方法について理解を深める。									
学修者への期待等	講義内で学んだ発達障害・学習障害について基本的な内容を理解し説明することができるようになることを期待する。									
回	授業計画			準備学修			担当			
1	発達障害の概念・定義						須賀川 芳夫			
2	知的発達障害の診断基準と支援/ダウン症とウィリアムス症候群			授業後に配布した資料を確認しておくこと(30分)			須賀川 芳夫			
3	自閉スペクトラム症の基本症状			授業後に配布した資料を確認しておくこと(30分)			須賀川 芳夫			
4	自閉スペクトラム症当事者の声 適宜グループワークを行う			授業後に配布した資料を確認しておくこと(30分)			小松 有希			
5	心の理論について 適宜グループワークを行う			授業後に配布した資料を確認しておくこと(30分)			小松 有希			
6	自閉スペクトラム症の概念と変遷 適宜グループワークを行う			授業後に配布した資料を確認しておくこと(30分)			小松 有希			
7	学習障害の定義と下位分類			授業後に配布した資料を確認しておくこと(30分)			須賀川 芳夫			
8	読み書きの困難、心理的疑似体験			授業後に配布した資料を確認しておくこと(30分)			須賀川 芳夫			
9	読み書きの困難の評価			授業後に配布した資料を確認しておくこと(30分)			須賀川 芳夫			
10	読み書きの困難への対応・支援			授業後に配布した資料を確認しておくこと(30分)			須賀川 芳夫			
11	算数障害のサブタイプと支援			授業後に配布した資料を確認しておくこと(30分)			須賀川 芳夫			
12	自閉スペクトラム症児への支援 適宜グループワークを行う			授業後に配布した資料を確認しておくこと(30分)			小松 有希			
13	ADHDの症状と二次障害 適宜グループワークを行う			授業後に配布した資料を確認しておくこと(30分)			小松 有希			
14	ADHDの基本的な対応 適宜グループワークを行う			授業後に配布した資料を確認しておくこと(30分)			小松 有希			
15	幼児の育ち、言葉の育ちに必要なもの・幼児支援のアセスメント 適宜グループワークを行う			授業後に配布した資料を確認しておくこと(30分)			小松 有希			
教科書	『標準言語聴覚障害学 言語発達障害学(最新版)』深浦 順一 / 藤野 博 / 石坂 郁代編 医学書院 『2026年版言語聴覚士国家試験過去問題3年間の解答と解説』大揚社 2025年7月頃発売予定									
参考文献	参考書：『健診とことばの相談』中川信子(著) ぶどう社 『教師のため合理的配慮の基礎知識』西村修一・久田信行(著) 明治図書									
備考										

※以下は該当者のみ記載する。

実務経験を有する教員による授業科目(実務経験の概要、実務経験と授業科目との関連性)

言語聴覚士として、臨床にて20年以上の経験あり。

学修成果	1	2	3	4	5	科目ナンバリング				
	基礎力	実践力	人間関係力	生涯学習力	地域理解力	ST-2-VDS-03				
	●	●								
科目名	運動障害性構音障害 I				単位認定者	櫻庭 ゆかり		試験(筆記・レポート)	70 %	
対象学科 必修・選択 配当年次	言語聴覚学科	必修	1年	開講時期	後期	単位数	1 単位	評価の方法	受講態度	30 %
					授業形態	演習	授業時間数		30 時間	
							授業回数		15 回	
授業の概要	運動障害性構音障害とは神経系の病変による、発声発語器官の運動障害によって引き起こされる発声発語の障害で、発話は、複雑、微細、敏速な、極めてレベルの高い巧緻動作であり自動的、無意識的な運動である。また発声発語器官の構造が複雑で、その運動が目には見えず、感覚-運動系の連携のみにより成り立つという特徴をもつ。本講義では、運動障害性構音障害のタイプ分類の特徴を、脳の障害部位と関連付けて学ぶ。									
到達目標	神経系の障害に起因する運動障害性構音障害の原因と特徴を理解し、説明できる。									
学修者への期待等	理解と記憶は一度だけではなく、繰り返し行うことを望む。また毎回、クラスメートとの確認作業を行う。知識の整理と発展、さらには患者様へ説明を行うためのトレーニングを兼ねるので、真剣に参加してほしい。									
回	授業計画				準備学修					
1	ガイダンス 運動障害性構音障害とは				教科書137ページから139ページまでを読んでおくこと。(40分程度)					
2	発声発語と神経・筋系の仕組み 1 神経				教科書27ページから33ページまでを読んでおくこと。(40分程度)					
3	発声発語と神経・筋系の仕組み 1 呼気コントロールの生理				教科書2ページから6ページまでを読んでおくこと。(40分程度)					
4	発声発語と神経・筋系の仕組み2 発声器官の解剖				教科書11ページから18ページまでを読んでおくこと。(40分程度)					
5	発声発語と神経・筋系の仕組み3 発声のメカニズムと調整				教科書5ページから10ページまでと40ページを読んでおくこと。(40分程度)					
6	原因疾患と発話の特徴 1 発話症状				教科書140ページから143ページまでを読んでおくこと。(40分程度)					
7	発声発語器官と神経制御の役割				教科書34ページから38ページを読んでおくこと。(40分程度)					
8	神経疾患1 脳血管障害、脳腫瘍、外傷				教科書177ページから178ページを読んでおくこと。(40分程度)					
9	神経疾患 2 神経変性疾患				178ページの2) から182ページのbの上までを読んでおくこと。(40分程度)					
10	運動障害性構音障害のタイプと発話特徴 1. 痙性構音障害 適宜グループワークを行う				141ページの①②を読み音源を聞いて特徴と照らし合わせておくこと (40分程度)					
11	運動障害性構音障害のタイプと発話特徴 2. 弛緩性構音障害 適宜グループワークを行う				141ページの③を読み音源を聞いて特徴と照らし合わせておくこと (40分程度)					
12	運動障害性構音障害のタイプと発話特徴 3. 失調性構音障害 適宜グループワークを行う				141ページの④を読み音源を聞いて特徴と照らし合わせておくこと (40分程度)					
13	運動障害性構音障害のタイプと発話特徴 4. 運動低下性構音障害 適宜グループワークを行う				142ページの⑤を読み音源を聞いて特徴と照らし合わせておくこと (40分程度)					
14	運動障害性構音障害のタイプと発話特徴 5. 運動低下性構音障害 適宜グループワークを行う				142ページの⑥を読み音源を聞いて特徴と照らし合わせておくこと (40分程度)					
15	運動障害性構音障害のタイプと発話特徴 6. 混合性構音障害 適宜グループワークを行う				142ページの⑦を読み音源を聞いて特徴と照らし合わせておくこと (40分程度)					
教科書	『標準言語聴覚障害学 発声発語障害学 (最新版)』城本修/原由紀編 医学書院 『言語聴覚士のための運動障害性構音障害学』廣瀬肇/柴田貞雄/白坂康俊著 医歯薬出版 『2026年版言語聴覚士国家試験過去問題3年間の解答と解説』大揚社 2025年7月頃発売予定									
参考文献	『病気がみえるvol.7 脳と神経 (第2版)』医療情報科学研究所 編 メディックメディア									
備考	適宜、資料を配布するので、ファイリングしておくこと。課題についてのフィードバックは、次回講義時、またはそれまでに口頭やレポートに記載する形で行う。□									

※以下は該当者のみ記載する。

実務経験を有する教員による授業科目(実務経験の概要、実務経験と授業科目との関連性)
言語聴覚士として20年以上の臨床経験あり。

学修成果	1	2	3	4	5	科目ナンバリング				
	基礎力	実践力	人間関係力	生涯学習力	地域理解力	ST-2-VDS-05				
	●	●		●	●					
科目名	摂食嚥下障害 I				単位認定者	江畑 綾		試験(筆記)	70 %	
対象学科 必修・選択 配当年次	言語聴覚学科	必修	1年	開講時期	通年	単位数	1 単位	評価の方法	授業内課題等	20 %
					授業形態	講義	授業時間数		30 時間	受講態度
						授業回数	15 回			
授業の概要	摂食嚥下障害の理解を深めるため、健常者の正常嚥下の流れを把握し、嚥下障害患者と比較してどこに違いが生じるのか、どうしてそのような運動、症状になるのかについて深く考察していく。嚥下障害が引き起こす病態について理解するとともに、機能的・器質的な症状について把握するため、言語聴覚士が行うことのできる検査など演習を通じて評価の目的と概要について学んでいく。嚥下造影検査の読影、内視鏡検査の評価その他、他職種が実施する検査についても理解を広げ、摂食嚥下リハビリテーションのチームアプローチの基礎について学ぶ。									
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> 成人領域における摂食嚥下のメカニズム、病態を理解する。 摂食嚥下障害の評価方法を習得し、問題点を抽出することができる。 									
学修者への期待等	<ul style="list-style-type: none"> 成人嚥下において、正しい知識に基づき評価を行うことができる。 言語聴覚士として他職種へ情報提供を行うことができ、コミュニケーションが図れる。 									
回	授業計画				準備学修					
1	成人領域に対する言語聴覚士の摂食嚥下リハビリテーション。摂食嚥下機能に関わる器官の解剖①				教科書P15～24を事前に予習すること。(30分程) 講義内容を復習すること(30分程)					
2	嚥下機能の解剖② (嚥下5期モデルに関わる筋の構成とその機能)				教科書P15～24を事前に予習すること。(30分程) 講義内容を復習すること(30分程)					
3	嚥下機能の生理・神経機構 (嚥下5期モデルに関わる神経機構とその機能)				教科書P15～24を事前に予習すること。(30分程) 講義内容を復習すること(30分程)					
4	嚥下運動のメカニズム (嚥下反射のメカニズム、嚥下と呼吸の関係)				教科書P10～14を事前に予習すること。(30分程) 講義内容を復習すること(30分程)					
5	嚥下障害の症状と原因(摂食嚥下障害を引き起こす疾患とその症状・嚥下障害の2次的問題)				教科書P67～86を事前に予習すること。(30分程) 講義内容を復習すること(30分程)					
6	各期での嚥下障害の症状 (嚥下5期モデルにおける嚥下障害の症状と問題)				【事後】講義内容を復習すること(1時間程)					
7	嚥下障害の評価①(評価とは。観察評価の視点。問診/EAT-10、聖隷式嚥下質問紙)				教科書P189～191を事前に予習すること。(30分程) 講義内容を復習すること(30分程)					
8	嚥下障害の評価②(実技演習) (嚥下機能に関わる諸器官・機能の評価)				教科書P198～196を事前に予習すること。(30分程) 講義内容を復習すること(30分程)					
9	嚥下障害の評価③ スクリーニング評価(実技演習) (RSS T・改定水飲み検査・頸部聴診法)				教科書P191～194を事前に予習すること。(30分程) 講義内容を復習すること(30分程)					
10	嚥下障害の評価④(実技演習、グループワーク) (フードテスト、食事場面観察、記録練習など)				【事後】講義内容を復習すること(1時間程)					
11	嚥下障害の評価⑤ (嚥下機能検査/嚥下造影検査)				教科書P203～208を事前に予習すること。(30分程) 講義内容を復習すること(30分程)					
12	嚥下障害の評価⑥・グループワーク (嚥下機能検査/嚥下造影検査)				教科書P203～208を事前に予習すること。(30分程) 講義内容を復習すること(30分程)					
13	嚥下障害の評価⑦ (嚥下機能検査/嚥下内視鏡検査)				教科書P208～211を事前に予習すること。(30分程) 講義内容を復習すること(30分程)					
14	嚥下障害の評価⑧・グループワーク (嚥下機能検査/嚥下造影検査、その他の検査)				教科書P203～217を事前に予習すること。(30分程) 講義内容を復習すること(30分程)					
15	評価のまとめ・検査結果から導出される問題点				【事後】講義内容を復習すること(1時間程)					
教科書	『標準言語聴覚障害学 摂食嚥下障害学』 藤田郁代 監修 椎名英貴編著 医学書院 『2026年版言語聴覚士国家試験過去問題3年間の解答と解説』 大揚社 2025年7月頃発売予定									
参考文献										
備考	適時小テストを行います。採点后フィードバックを行い返却します。 授業内容は状況に応じて変更する場合があります。適宜グループディスカッションを行います。									

※以下は該当者のみ記載する。

実務経験を有する教員による授業科目(実務経験の概要、実務経験と授業科目との関連性)

言語聴覚士として、臨床にて5年以上の経験あり。

学修成果	1	2	3	4	5	科目ナンバリング				
	基礎力	実践力	人間関係力	生涯学習力	地域理解力	ST-2-HDS-03				
	●	●		●						
科目名	聴力検査 I				単位 認定者	渡邊 弘人		試験(筆記・レポート)	70 %	
対象学科 必修・選択 配当年次	言語聴覚学科	必修	1年	開講時期	後期	単位数	1 単位	評価の方法	授業内課題等	30 %
					授業形態	演習	授業時間数		15 時間	
				授業回数		8 回				
授業の概要	音声言語の入力経路＝聴覚機能に関する検査について、各種の聴力検査の概要とその目的について知る。聴覚検査の基本である純音・語音聴力検査の実技を、各種の聴覚検査の方法・機能・診断的意義の概要、留意点と問題点の講述、検査デモンストレーションを含めて学ぶ。									
到達目標	言語聴覚士が行う聴力検査の概要・目的・実施手順について理解する。									
学修者への期待等	聴力検査を理解するためには、聴覚系の解剖・生理の理解が求められるため、「聴覚系の機能・構造・病態」の講義内で行った内容を復習しておくこと。									
回	授業計画				準備学修					
1	聴覚検査総論 自覚的検査と他覚的検査				テキスト第1部「聴覚検査の予備知識」を予習・復習すること(1時間)。					
2	自覚的聴覚検査Ⅰ：純音聴力検査① 原理と目的 適宜グループワークを実施する				テキスト第Ⅱ部内、「1、純音聴力検査」を予習・復習すること(1時間)。					
3	自覚的聴覚検査Ⅰ：純音聴力検査② オーディオメータの各種機能 適宜グループワークを実施する				テキスト第Ⅱ部内、「1、純音聴力検査」を予習・復習すること(1時間)。					
4	自覚的聴覚検査Ⅰ：純音聴力検査③ 実施手順と注意点 適宜グループワークを実施する				テキスト第Ⅱ部内、「1、純音聴力検査」を予習・復習すること(1時間)。					
5	聴覚マスキング 聴力検査用マスキング音の種類と特性 適宜グループワークを実施する				「1、純音聴力検査」内、「D、マスキング」を予習・復習すること(1時間)。					
6	聴覚検査演習①：純音聴力検査(気導聴力検査) 適宜グループワークを実施する				「1、純音聴力検査」内、検査手順について予習・復習すること(1時間)。					
7	聴覚検査演習②：純音聴力検査(骨導聴力検査) 適宜グループワークを実施する				「1、純音聴力検査」内、検査手順について予習・復習すること(1時間)。					
8	聴覚検査演習③：オーディオグラムへの記録方法 検査結果の解釈 適宜グループワークを実施する				「1、純音聴力検査」内、記録方法について予習・復習すること(1時間)。					
教科書	『聴覚検査の実際(最新版)』 日本聴覚医学会(編) 南山堂 『2026年版言語聴覚士国家試験過去問題3年間の解答と解説』 大揚社 2025年7月頃発売予定									
参考文献	『基本的聴覚検査マニュアル(改訂3版)』 服部浩 金芳堂									
備考	聴覚演習室で講義・演習を行う予定である。授業内課題は、採点した後に返却してフィードバックを行う。									

※以下は該当者のみ記載する。

実務経験を有する教員による授業科目(実務経験の概要、実務経験と授業科目との関連性)

臨床経験10年以上の言語聴覚士が担当する

学修成果	1	2	3	4	5	科目ナンバリング				
	基礎力	実践力	人間関係力	生涯学習力	地域理解力	ST-3-SOC-07				
	●	●		●						
科目名	言語聴覚障害学の基礎				単位認定者	渡邊 弘人 小松 有希		試験	70 %	
対象学科 必修・選択 配当年次	言語聴覚学科	必修	1年	開講時期	通年	単位数	2 単位	評価の方法	授業内課題等	15 %
					授業形態	講義	授業時間数		30 時間	受講態度
						授業回数	15 回			
授業の概要	医療・教育・福祉の分野に広くかかわる言語聴覚障害について、成人領域、小児領域、聴覚障害領域で大きく分類し、それぞれの特徴と言語聴覚士の専門性について学ぶ。さらに本講義は学生による専門領域別概要レポートの発表を重視することで、自ら調べ考察する姿勢を育成し、主体的な判断と行動する能力を育む基礎とする。									
到達目標	言語聴覚士の全体像を俯瞰することを目的とする。これから3年間で学ぶ領域について知り、3年後に受ける国家試験の内容・難易度を知る。									
学修者への期待等	授業は各グループ（1グループ4～5名）ごとに内容をまとめ発表する形式をとる。発表する領域については、授業開始時に発表する。グループメンバー内で担当領域についてしっかりと話し合い、協力して進めることを期待したい。									
回	授業計画				準備学修			担当		
1	言語聴覚士の概要、言語聴覚療法について				クリア言語聴覚障害総論の第1・2章を予習・復習すること(1時間)			渡邊 弘人		
2	言語聴覚士の仕事、役割、活躍の場について、各グループでプレゼンテーション資料を作成する。(グループワーク)				クリア言語聴覚障害総論の第1・2章を予習・復習すること(1時間)			渡邊 弘人		
3	言語聴覚士の仕事、役割、活躍の場について、フィードバックを受け、加筆・修正し、プレゼンテーションの準備をおこなう(グループワーク)				クリア言語聴覚障害総論の第1・2章を予習・復習すること(1時間)			渡邊 弘人		
4	言語聴覚士の仕事、役割、活動の場について、グループ発表とディスカッション				言語聴覚士テキスト P319～348を読むこと(3時間)			渡邊 弘人		
5	聴覚と平衡機能の検査について、各グループでプレゼンテーション資料を作成する。(グループワーク)				言語聴覚士テキスト P324～337を読むこと(3時間)			渡邊 弘人		
6	聴覚と平衡機能の検査について、フィードバックを受け、加筆・修正し、プレゼンテーションの準備をおこなう(グループワーク)				言語聴覚士テキスト P324～337を読むこと(3時間)			渡邊 弘人		
7	聴覚と平衡機能の検査について、グループ発表とディスカッション				言語聴覚士テキスト P324～337を読むこと(3時間)			渡邊 弘人		
8	言語発達障害について各グループでプレゼンテーション資料を作成する。(グループワーク)				言語聴覚士テキスト P298～311を読むこと(3時間)			小松 有希		
9	言語発達障害についてフィードバックを受け、加筆・修正しプレゼンテーションの準備をおこなう(グループワーク)				言語聴覚士テキスト P298～311を読むこと(3時間)			小松 有希		
10	言語発達障害についてグループ発表とディスカッション				言語聴覚士テキスト P298～311を読むこと(3時間)			小松 有希		
11	医学総論について各グループでプレゼンテーション資料を作成する。(グループワーク)				言語聴覚士テキスト P2～9を読むこと(2時間)			小松 有希		
12	医学総論についてグループ発表とディスカッション				言語聴覚士テキスト P2～9を読むこと(2時間)			小松 有希		
13	失語症について各グループでプレゼンテーション資料を作成する。(グループワーク)				言語聴覚士テキスト P268～281を読むこと(3時間)			小松 有希		
14	失語症についてフィードバックを受け、加筆・修正しプレゼンテーションの準備をおこなう(グループワーク)				言語聴覚士テキスト P268～281を読むこと(3時間)			小松 有希		
15	失語症についてのグループ全体発表、発表後フィードバック、全体の総評				言語聴覚士テキスト P268～281を読むこと(3時間)			小松 有希		
教科書	クリア言語聴覚療法1 言語聴覚障害総論 内山 量史 鈴木 真生(編著) 建帛社 『言語聴覚士テキスト(第4版)』大森孝一他 編著 医歯薬出版 『言語聴覚士国家試験 必修ポイント2025 ST専門科目』医歯薬出版 『言語聴覚士国家試験 必修ポイント2025 ST基礎科目』医歯薬出版									
参考文献	『明日からの臨床・実習に使える言語聴覚障害診断』大塚裕一 医学と看護社									
備考	授業は各グループ(1グループ6～7名)ごとに内容をまとめ発表する形式をとる。発表する領域については、授業開始時に決める。グループ発表をもとにしたレポート作成、小テストを実施する。小テストは採点したのちに返却して、フィードバックを行う。									

※以下は該当者のみ記載する。

実務経験を有する教員による授業科目(実務経験の概要、実務経験と授業科目との関連性)
言語聴覚士として、臨床現場にて10年以上の経験あり。

学修成果	1	2	3	4	5	科目ナンバリング			
	基礎力	実践力	人間関係力	生涯学習力	地域理解力	ST-1-PCL-04			
		●		●					
科目名	心理測定法				単位認定者	真覚 健 渡邊 弘人 小松 有希		試験(筆記)	100 %
対象学科 必修・選択 配当年次	言語聴覚学科	必修	2年	開講時期	通年	単位数	1 単位	評価の方法	
				授業形態	講義	授業時間数	30 時間		
						授業回数	15 回		
授業の概要	心理測定法とは、心理現象を把握するために用いる研究手法である。本講義では、心理測定の基礎について、測定対象、測定方法、恒常誤差、尺度水準、尺度構成法、テスト理論、調査法、データ解析法について学修し、心理測定法に関する知識を身につける。講義後半には言語聴覚領域との関連の深い事例について、測定の実践を通して理解を深める。								
到達目標	心理学において用いられる主な測定法とデータ解析法の特徴を知る								
学修者への期待等	質疑応答の機会を設けますので、わからないことがありましたら遠慮なく質問してください。								
回	授業計画			準備学修			担当		
1	心理測定の基礎			配布資料について事前に学修し、授業内での質問に答えられるようにしておくこと (概ね1時間)			真覚 健		
2	測定の水準			配布資料について事前に学修し、授業内での質問に答えられるようにしておくこと (概ね2時間)			真覚 健		
3	誤差			配布資料について事前に学修し、授業内での質問に答えられるようにしておくこと (概ね3時間)			真覚 健		
4	精神物理学的測定法			配布資料について事前に学修し、授業内での質問に答えられるようにしておくこと (概ね4時間)			真覚 健		
5	尺度構成法			配布資料について事前に学修し、授業内での質問に答えられるようにしておくこと (概ね5時間)			真覚 健		
6	検査の妥当性と信頼性			配布資料について事前に学修し、授業内での質問に答えられるようにしておくこと (概ね6時間)			真覚 健		
7	質問紙調査			配布資料について事前に学修し、授業内での質問に答えられるようにしておくこと (概ね7時間)			真覚 健		
8	多変量解析と統計的検定			配布資料について事前に学修し、授業内での質問に答えられるようにしておくこと (概ね8時間)			真覚 健		
9	言語聴覚療法における研究 (1) 心理統計と言語聴覚療法 グループワーク			言語聴覚療法に関わる論文を読むこと (概ね60分)			渡邊 弘人		
10	言語聴覚療法における研究 (2) データ収集と統計の実際			前回の講義資料を読むこと (概ね60分)			渡邊 弘人		
11	言語聴覚療法における研究 (3) 研究に使用されるデータとは グループワーク			論文を読み、データについて考察すること (概ね60分)			渡邊 弘人		
12	聴覚領域検査における研究 (4) 研究におけるデータをまとめる グループワーク			言語聴覚療法に関わる論文を読むこと (概ね60分)			渡邊 弘人		
13	言語聴覚療法研究法 精神物理学的測定法の理解 (過去問題の実施・適宜グループワーク)			言語聴覚療法に関連する資料の復習 (概ね60分)			小松 有希		
14	言語聴覚療法研究法 尺度構成法の各実験手法の理解 (過去問題の実施・適宜グループワーク)			言語聴覚療法に関連する資料の復習 (約60分)			小松 有希		
15	言語聴覚療法研究法 データ解析の理解 (過去問題の実施・適宜グループワーク)			言語聴覚療法に関連する資料の復習 (約60分)			小松 有希		
教科書	『2026年版言語聴覚士国家試験過去問題3年間の解答と解説』大揚社 2025年7月頃発売予定：小松担当講義で使用								
参考文献	参考書：『心理測定法への招待：測定からみた心理学入門』市川伸一編著 サイエンス社								
備考	授業内課題は、採点後に返却しフィードバックを行う								

※以下は該当者のみ記載する。

実務経験を有する教員による授業科目(実務経験の概要、実務経験と授業科目との関連性)

言語聴覚士として、臨床現場にて10年以上の経験あり。

学修成果	1	2	3	4	5	科目ナンバリング			
	基礎力	実践力	人間関係力	生涯学習力	地域理解力	ST-1-ACS-02			
		●		●					
科目名	聴覚心理学				単位 認定者	渡邊 弘人 矢入 聡		試験(筆記)	100 %
対象学科 必修・選択 配当年次	言語聴覚学科	必修	2年	開講時期	通年	単位数	1 単位	評価の 方法	
					授業形態	講義	授業時間数		30 時間
				授業回数		15 回			
授業の概要	音を認識するための聴覚系の処理について、実例を通して理解を深める。音の性質には、物理的側面と心理的側面がある。音の大きさ、高さ、音色は音の3要素と呼ばれ、音を聞くことは、その3要素について心で感じる、思うことであり、心理尺度となる。これに対して音の強さ、音圧、周波数、スペクトルなどは音の物理的な性質を表すため物理量となる。本講義では、特に聴覚的に感じる大きさ・強さ・高さ（フォン/son・mel）と、物理的な大きさ・強さ・高さ（dB SPL・Hz）との違いについて理解を深める。他の聴覚系授業とのつながりも強いことから、それぞれの関連性を重視し、理解を深めていく。								
到達目標	実例を通して、人間が感じる音の特性にどのようなものがあり、物理的な特性とどう関係するかを理解する。								
学修者への期待等	1年次の科目を含む他の聴覚系授業とのつながり強い科目です。適宜実例を示しながら授業を進めていきますので、他で学んだ内容の理解を深めたり、ここで学んだ内容を他の科目に応用したりできるように、興味を持って取り組んでください。								
回	授業計画				準備学修			担当	
1	知覚表象形成と音の強さ 聴覚における知覚表象形成、音の強さの表現				【事後】授業の内容を踏まえdBの計算ができるようにすること（60分程度）			矢入 聡	
2	音の大きさの知覚 音の大きさの表現、音の大きさに影響する要因				【事後】音の大きさの表現を整理しておくこと（60分程度）			矢入 聡	
3	音の高さの知覚① 音の周波数と高さの対応、音の高さ知覚の理論、音の高さを表現する尺度				【事後】場所説と時間説についてそれぞれ整理しておくこと（60分程度）			矢入 聡	
4	音の高さの知覚② 音の高さに影響する要因、音楽の高さ、音律				【事後】音律について授業で紹介した以外のものを調べてみる（60分程度）			矢入 聡	
5	マスキングと聴覚フィルタ マスキングの種類と特徴、臨界帯域と聴覚フィルタ				【事後】マスキングの種類について整理しておくこと（60分程度）			矢入 聡	
6	音色と楽器音 音色の定義、協和度、楽器音の特徴				【事前】身近な楽器を1つあげ、どのようにして音が出るか考えてみる（60分程度）			矢入 聡	
7	音の定位 音源方向の知覚、音の広がり感、両耳聴の効果				【事前】日常の音やその到来方向を意識して1日を過ごしてみる（60分程度）			矢入 聡	
8	聴覚心理のメカニズム 音の選択的聴取、視聴覚相互作用				【事後】取り上げた種々の視聴覚相互作用について整理しておくこと（60分程度）			矢入 聡	
9	聴覚心理と言語聴覚療法の関係（1）聴覚解剖と生理 グループワークを適宜実施する				1年次の聴覚関連講義の復習（60分程度）			渡邊 弘人	
10	聴覚心理と言語聴覚療法の関係（2）聴覚検査の構成 グループワークを適宜実施する				1年次の聴覚関連講義の復習（60分程度）			渡邊 弘人	
11	聴覚心理と言語聴覚療法の関係（3）聴覚検査におけるSPL、HL、SLの関係 グループワークを適宜実施する				1年次の聴覚関連講義の復習（60分程度）			渡邊 弘人	
12	聴覚心理と言語聴覚療法の関係（4）聴覚検査における音の大きさの知覚 グループワークを適宜実施する				1年次の聴覚関連講義の復習（60分程度）			渡邊 弘人	
13	聴覚心理と言語聴覚療法の関係（5）聴覚検査における音の高さの知覚 グループワークを適宜実施する				1年次の聴覚関連講義の復習（60分程度）			渡邊 弘人	
14	聴覚心理領域と言語聴覚療法の関係（6）聴覚補償機器との関係 グループワークを適宜実施する				1年次の聴覚関連講義の復習（60分程度）			渡邊 弘人	
15	聴覚心理領域と言語聴覚療法の関係（7）まとめ グループワークを適宜実施する				1年次の聴覚関連講義の復習（60分程度）			渡邊 弘人	
教科書	『2026年版言語聴覚士国家試験過去問題3年間の解答と解説』大揚社 2025年7月頃発売予定：渡邊担当講義で使用								
参考文献	『音響学入門（音響入門シリーズ）』鈴木陽一ほか コロナ社								
備考	第1回～第8回講義は遠隔（オンデマンド）で実施する。 授業内課題は採点后に返却し、フィードバックを行う								

※以下は該当者のみ記載する。

実務経験を有する教員による授業科目(実務経験の概要、実務経験と授業科目との関連性)

言語聴覚士として、臨床現場にて10年以上の経験あり。

学修成果	1	2	3	4	5	科目ナンバリング			
	基礎力	実践力	人間関係力	生涯学習力	地域理解力	ST-2-AHB-04			
		●	●	●					
科目名	失語症・高次脳機能障害Ⅱ				単位認定者	中川 大介		試験(筆記)	100 %
対象学科 必修・選択 配当年次	言語聴覚学科	必修	2年	開講時期	通年	単位数	2 単位	評価の方法 <td></td>	
					授業形態	演習	授業時間数		60 時間
				授業回数		30 回			
授業の概要	<p>「失語症・高次脳機能障害Ⅰ」で学んだ内容を踏まえて、複合的障害についての介入方法について学修する。併せて、発話症状の書き取り方、所見報告書の書き方についての演習を行う。検査プロフィールから症例の言語症状を分析して聴く、話す、読む、書く、計算する機能の介入方法や訓練立案を学ぶ。また、検査プロフィールだけではとらえきれない重症度による訓練方法や、失語症者の心理面、社会復帰についても学ぶ。症例報告書の書き方、観察のポイントなども学修する。1年次に引き続き高次脳機能障害の各検査演習を行う。</p>								
到達目標	<p>根拠に基づいた訓練法を立案することができ、且つ謙虚な態度で失語症・高次脳機能障害者と向き合うことのできる高い人間性を備えた言語聴覚士像を目指す。</p>								
学修者への期待等	<p>教科書や国家試験問題などで予習、復習を行い授業内容を十分に理解する。自主的に検査演習に取り組み検査の意義や目的、検査結果から症例を分析してまとめることができることを望む。</p>								
回	授業計画				準備学修				
1	高次脳機能障害のリハビリテーション				高次脳機能障害学（第3版）第1章を読む（約30分）				
2	面接、観察、検査における情報収集				前回の復習（約30分）				
3	問題点の抽出と目標設定				前回の復習（約30分）				
4	訓練の実施と再評価				前回の復習（約30分）				
5	スクリーニング検査				前回の復習（約30分）				
6	MMSE、HDS-R、FAB等の検査について				前回の復習（約30分）				
7	高次脳機能障害の検査の概要、種類				前回の復習（約30分）				
8	知能検査 WAIS-IV 目的、概要、積木模様～行列推理				前回の復習（約30分）				
9	知能検査 WAIS-IV 単語～知識				前回の復習（約30分）				
10	知能検査 WAIS-IV バランス～絵の完成				前回の復習（約30分）				
11	注意・意欲検査 CAT/CAS 意欲について				前回の復習（約30分）				
12	注意・意欲検査 CAT/CAS Span～SDMT				前回の復習（約30分）				
13	注意・意欲検査 CAT/CAS 記憶更新検査～CPT				前回の復習（約30分）				
14	注意検査 TMT-A・B、仮名ひろい検査				前回の復習（約30分）				
15	記憶検査 WMS-R 情報と見当識～視覚性記憶範囲				前回の復習（約30分）				

回	授業計画	準備学修
16	記憶検査 WMS-R 論理的記憶Ⅰ～視覚性再生Ⅱ	前回の復習(約30分)
17	記憶検査 三宅式記銘力検査、レイの複雑図形検査など	前回の復習(約30分)
18	記憶検査 AVLT、ベントン視覚記銘検査	前回の復習(約30分)
19	記憶検査 リバーミード行動記憶検査 姓名～物語	前回の復習(約30分)
20	記憶検査 リバーミード行動記憶検査 絵～持ち物	前回の復習(約30分)
21	視空間認知検査 VPTA	前回の復習(約30分)
22	視空間認知検査 BIT行動性無視検査	前回の復習(約30分)
23	遂行機能検査 BADS 規則変換カード～鍵探し検査	前回の復習(約30分)
24	遂行機能検査 BADS 時間判断検査～DEX	前回の復習(約30分)
25	言語機能検査 掘り下げ検査 SALA、TLPA	前回の復習(約30分)
26	高次脳機能障害、失語症者とのコミュニケーション	前回の復習(約30分)
27	高次脳機能障害訓練①(記憶障害、注意障害、社会的行動障害)	前回の復習(約30分)
28	高次脳機能障害訓練②(遂行機能障害、視空間認知障害、失行)	前回の復習(約30分)
29	言語機能訓練①(重度失語症～軽度失語症)適宜グループワークを行う	前回の復習(約30分)
30	言語機能訓練②(認知神経心理学モデル)適宜グループワークを行う	前回の復習(約30分)
教科書	『標準言語聴覚障害学 失語症学(第3版)』 藤田 郁代編 医学書院 『標準言語聴覚障害学 高次脳機能障害学(第3版)』 藤田 郁代、阿部 晶子 編 医学書院 『なるほど!失語症の評価と治療』 小嶋知幸(編著) 金原出版 『2026年版言語聴覚士国家試験過去問題3年間の解答と解説』 大揚社 2025年7月頃発売予定	
参考文献	『失語症の障害メカニズムと訓練法』 小嶋知幸他著 新興医学出版社	
備考		

※以下は該当者のみ記載する。

実務経験を有する教員による授業科目(実務経験の概要、実務経験と授業科目との関連性)

言語聴覚士として、臨床に15年以上の経験あり。

学修成果	1	2	3	4	5	科目ナンバリング			
	基礎力	実践力	人間関係力	生涯学習力	地域理解力	ST-2-LDS-02			
		●	●	●					
科目名	言語発達障害Ⅱ				単位認定者	小松 有希		試験(筆記)	100 %
対象学科 必修・選択 配当年次	言語聴覚学科	必修	2年	開講時期	通年	単位数	2 単位		
				授業形態	演習	授業時間数	60 時間		
						授業回数	30 回		
授業の概要	「言語発達障害Ⅰ」を基に、小児を対象とした言語療法について演習を通して学ぶ。本講義では対象児に対し、個別自立課題等の適切な教材を考え作成できることを目標に、講義・演習を行っている。療育に必要な訓練知識・技術の修得を目指す。								
到達目標	小児領域で必要な諸検査の実施・評価・そこから支援への分析ができるようになる。								
学修者への期待等	積極的に演習に参加し、検査法や訓練法をしっかりと身につけていってください。								
回	授業計画				準備学修				
1	検査法 1 質問応答関係検査(実技と採点練習)				【事後】検査方法について授業内で行ったことを復習する。(約40分)				
2	検査法 2 質問応答関係検査(実技と採点練習)				【事後】検査方法について授業内で行ったことを復習する。(約40分)				
3	検査法 3 PVT-R (実技と採点練習)				【事後】検査方法について授業内で行ったことを復習する。(約40分)				
4	検査法 4 PVT-R (実技と採点練習)				【事後】検査方法について授業内で行ったことを復習する。(約40分)				
5	検査法 5 グッドイナフ人物画知能検査				【事後】検査方法について授業内で行ったことを復習する。(約40分)				
6	検査法 6 KABC 2 (実技と採点練習)				【事後】検査方法について授業内で行ったことを復習する。(約40分)				
7	検査法 7 KABC 2 (実技と採点練習)				【事後】検査方法について授業内で行ったことを復習する。(約40分)				
8	検査法 8 KABC 2 (実技と採点練習)				【事後】検査方法について授業内で行ったことを復習する。(約40分)				
9	検査法 9 KABC 2 (実技と採点練習)				【事後】検査方法について授業内で行ったことを復習する。(約40分)				
10	検査法 1 0 KABC 2 (実技と採点練習)				【事後】検査方法について授業内で行ったことを復習する。(約40分)				
11	検査法 1 1 WISC-V(実技と採点練習)				【事後】検査方法について授業内で行ったことを復習する。(約40分)				
12	検査法 1 2 WISC-V(実技と採点練習)				【事後】検査方法について授業内で行ったことを復習する。(約40分)				
13	検査法 1 3 WISC-V(実技と採点練習)				【事後】検査方法について授業内で行ったことを復習する。(約40分)				
14	検査法 1 4 WISC-V(実技と採点練習)				【事後】検査方法について授業内で行ったことを復習する。(約40分)				
15	検査法 1 5 WISC-V(実技と採点練習)				【事後】検査方法について授業内で行ったことを復習する。(約40分)				

回	授業計画	準備学修
16	検査法 1 6 田中ビネー知能検査V(検査概要と採点練習)	【事後】検査方法について授業内で行ったことを復習する。(約40分)
17	検査法 1 7 田中ビネー知能検査V(検査概要と採点練習)	【事後】検査方法について授業内で行ったことを復習する。(約40分)
18	検査法 1 8 LC-R、LCSA(検査概要と国家試験問題)	【事後】検査方法について授業内で行ったことを復習する。(約40分)
19	検査法 1 9 発達検査(遠城寺式など)(検査概要と採点練習)	【事後】検査方法について授業内で行ったことを復習する。(約40分)
20	検査法 2 0 S-M社会生活能力検査(検査概要と採点練習)	【事後】検査方法について授業内で行ったことを復習する。(約40分)
21	支援法 1 インリアルアプローチ	【事後】授業の内容を復習する。(約30分)
22	支援法 2 インリアルアプローチ	【事後】授業の内容を復習する。(約30分)
23	支援法 3 A B A(応用行動分析)	【事後】授業の内容を復習する。(約30分)
24	支援法 4 A B A(応用行動分析)	【事後】授業の内容を復習する。(約30分)
25	支援法 5 マカトン法	【事後】授業の内容を復習する。(約30分)
26	支援法 6 マカトン法	【事後】授業の内容を復習する。(約30分)
27	訓練法 1 S-S法に基づく訓練の進め方	【事前】言語発達障害についてこれまでの資料をもとに復習しておく。(約1時間)
28	訓練法 2 S-S法に基づく訓練の進め方	【事後】授業の内容を復習する。(約30分)
29	訓練法 3 S-S法に基づく訓練の進め方	【事後】授業の内容を復習する。(約30分)
30	訓練法 4 症例検討	【事前】これまでの内容を復習する。(約1時間)
教科書	配布資料を中心に授業を行っていきます。 『2026年版言語聴覚士国家試験過去問題3年間の解答と解説』大揚社 2025年7月頃発売予定	
参考文献	特になし	
備考		
※以下は該当者のみ記載する。		
実務経験を有する教員による授業科目(実務経験の概要、実務経験と授業科目との関連性)		
言語聴覚士。小児に関連する施設における臨床の実務経験を有する。		

学修成果	1	2	3	4	5	科目ナンバリング				
	基礎力	実践力	人間関係力	生涯学習力	地域理解力	ST-2-VDY-04				
		●	●	●						
科目名	運動障害性構音障害Ⅱ				単位認定者	櫻庭 ゆかり		試験(筆記・レポート)	70 %	
対象学科 必修・選択 配当年次	言語聴覚学科	必修	2年	開講時期	通年	単位数	2 単位	評価の方法	受講態度	30 %
					授業形態	演習	授業時間数		60 時間	
							授業回数		30 回	
授業の概要	運動障害性構音障害について、タイプ別の訓練法を学び、訓練法の修得を目指す。姿勢の変化による発話への影響を知るため、寝返りから座位、さらには移乗動作も同時に演習する。「運動障害性構音障害Ⅰ」で学修した知識を基に、症例の問題点を整理し、訓練プログラムを立案、運動生理学の知識を取り入れ、訓練プログラムの実施へとつなげていく。さらに学生間において訓練の実際を演習する。									
到達目標	各タイプごとの特徴を理解し、タイプに沿った訓練を実施できる。									
学修者への期待等	演習を含む。実技は繰り返しの練習がすべてであるので、怠らずに行ってほしい。									
回	授業計画				準備学修					
1	運動障害性構音障害の分類と特徴1 (運動低下性構音障害)				1年次の運動障害性構音障害を復習しておくこと (概ね30分)					
2	運動障害性構音障害の分類と特徴2 (運動低下性の特徴と訓練)				配布物に目を通すこと (概ね30分)					
3	運動障害性構音障害の分類と特徴3 (運動過多性)				1年次の運動障害性構音障害を復習しておくこと (概ね30分)					
4	運動障害性構音障害の分類と特徴4 (運動過多性の特徴と訓練)				1年次の運動障害性構音障害を復習しておくこと (概ね30分)					
5	運動障害性構音障害の分類と特徴5 (混合性)				1年次の運動障害性構音障害を復習しておくこと (概ね30分)					
6	運動障害性構音障害の分類と特徴6 (混合性の特徴と訓練)				テキストの該当ページを読んでおくこと (概ね30分)					
7	発声発語器官の検査1 (演習) 呼吸に関わる検査				テキストの該当ページを読んでおくこと (概ね30分)					
8	発声発語器官の検査2 (演習) 発声発語器官の範囲に関わる検査				テキストの該当ページを読んでおくこと (概ね30分)					
9	発声発語器官の検査3 (演習) 発声発語器官の速さに関わる検査				テキストの該当ページを読んでおくこと (概ね30分)					
10	発声発語器官の検査4 (演習) 発声発語器官の筋力に関わる検査				テキストの該当ページを読んでおくこと (概ね30分)					
11	発声発語器官の検査5 (演習) 発声発語器官の反射・筋緊張に関わる検査				テキストの該当ページを読んでおくこと (概ね30分)					
12	発声発語器官の検査6 (演習) SLTA - STの演習と記録				テキストの該当ページを読んでおくこと (概ね30分)					
13	異常構音のディクテーション グループワークを行う				テキストの該当ページを読んでおくこと (概ね30分)					
14	検査結果の分析1 全体評価から読み取れる問題点の抽出				テキストの該当ページを読んでおくこと (概ね30分)					
15	検査結果の分析2 全体評価から読み取れる問題点のまとめ				テキストの該当ページを読んでおくこと (概ね30分)					

回	授業計画	準備学修
16	機能訓練法1 機能訓練の意義と原則 痙性の障害 弛緩性の障害 演習	前回の復習 (概ね30分)
17	機能訓練法2 機能訓練の意義と原則 失調性の障害 運動低下性 運動過多性 演習	前回の復習 (概ね30分)
18	機能訓練法3 各器官の粗大運動の機能訓練 呼吸 訓練 演習	前回の復習 (概ね30分)
19	機能訓練法4 各器官の粗大運動の機能訓練 口 唇 演習	前回の復習 (概ね30分)
20	機能訓練法5 各器官の粗大運動の機能訓練 下 顎 演習	前回の復習 (概ね30分)
21	機能訓練法6 各器官の粗大運動の機能訓練 舌 演習	前回の復習 (概ね30分)
22	機能訓練法7 筋緊張のコントロール (手技) 演 習	前回の復習 (概ね30分)
23	機能訓練法8 構音動作訓練 (破裂音, 摩擦音) 演習	前回の復習 (概ね30分)
24	機能訓練法9 構音動作訓練 (破擦音, 鼻音, 接近 音) 演習	前回の復習 (概ね30分)
25	機能訓練法10 音の産生 演習	前回の復習 (概ね30分)
26	発話訓練1 統合般化 演習	前回の復習 (概ね30分)
27	発話訓練2 プロソディー訓練 演習	前回の復習 (概ね30分)
28	発話訓練3 発話速度の調節法 演習	前回の復習 (概ね30分)
29	代償的手段の紹介 ノンテクとローテク 演習	前回の復習 (概ね30分)
30	代償的手段の紹介 ローテクとハイテク 演習	前回の復習 (概ね30分)
教科書	『標準言語聴覚障害学 発声発語障害学 (最新版)』城本 修、原 由紀 編 医学書院 『言語聴覚士のための運動障害性構音障害学』廣瀬肇他著 医歯薬出版 『2026年版言語聴覚士国家試験過去問題3年間の解答と解説』大揚社 2025年7月頃発売予定	
参考文献	『スピーチ・リハビリテーション第1巻～第5巻』 西尾正輝編 インテルナ出版	
備考		

※以下は該当者のみ記載する。

実務経験を有する教員による授業科目(実務経験の概要、実務経験と授業科目との関連性)

言語聴覚士として20年以上の臨床経験あり。

学修成果	1 基礎力	2 実践力	3 人間関係力	4 生涯学習力	5 地域理解力
		●	●	●	

科目ナンバリング
ST-2-VDY-07

科目名	摂食嚥下障害Ⅱ				単位 認定者	江畑 綾		評価の 方法	試験(筆記)	70 %
対象学科 必修・選択 配当年次	言語聴覚学科	必修	2年	開講時期	通年	単位数	2 単位		授業内課題	30 %
						授業時間数	60 時間			
				授業形態	演習	授業回数	30 回			
授業の概要	対象者の問題を、摂食嚥下機能検査・食事場面の観察・診療情報・他部門情報など総合的・包括的にとらえる。さらに対象者の問題点を整理し、予後を見据えた訓練プログラムの立案が行えるよう理解を深める。そのために必要な訓練手技について、目的・方法・対象・注意点を、講義と演習を通して修得する。嚥下障害に対する手術的な治療法についても触れ、言語聴覚士が行う術後のリハビリテーションについて学ぶ。									
到達目標	対象者の問題を、総合的かつ包括的に抽出し、対象者に適した訓練プログラムを立案することができる。摂食嚥下障害の治療の知識、リハビリテーション手技を獲得する。									
学修者への期待等	各手技に対してリスク管理を行いながら、実施できる。そして、各病態を理解し、個々のケースに合わせて、代償法や訓練プログラムなどを立案し実施できることを期待します。									
回	授業計画					準備学修				
1	嚥下に関連する筋の解剖、神経生理、メカニズムの復習					【事前・事後】テキストP10～28、65～109を読んでおくこと(概ね60分)				
2	嚥下機能評価①(嚥下造影検査・画像の評価)グループワーク					【事前・事後】関連配布資料、テキストP203～208を読むこと(概ね60分)				
3	嚥下機能評価②(嚥下内視鏡検査)					【事前・事後】関連配布資料、テキストP208～212を読むこと(概ね60分)				
4	嚥下機能評価③(嚥下内視鏡検査・画像の評価)グループワーク					【事前・事後】関連配布資料、テキストP208～212を読むこと(概ね60分)				
5	嚥下機能評価④(その他の検査)					【事前・事後】関連配布資料、テキストP213～216を読むこと(概ね60分)				
6	評価内容の解釈、訓練の考え方、組み立て					【事前・事後】関連配布資料、テキストP217～224を読むこと(概ね60分)				
7	間接練習①(口唇、舌、咀嚼筋の機能訓練)					【事前・事後】関連配布資料、テキストP292～299を読むこと(概ね60分)				
8	間接練習②(アイスマッサージ(咽頭、皮膚))					【事前・事後】関連配布資料、テキストP292～299を読むこと(概ね60分)				
9	間接練習③(Pushing ex 嚥下体操)					【事前・事後】関連配布資料、テキストP292～299を読むこと(概ね60分)				
10	間接訓練④(嚥下反射誘発手技 ブローイング訓練 頭部拳上訓練)					【事前・事後】関連配布資料、テキストP292～299を読むこと(概ね60分)				
11	直接訓練①(直接訓練実施の留意点)					【事前・事後】関連配布資料、テキストP292～299を読むこと(概ね60分)				
12	直接訓練②(姿勢調整・介助法)					【事前・事後】関連配布資料、テキストP292～299を読むこと(概ね60分)				
13	直接訓練③(頸部回旋 頭頸部屈曲位)					【事前・事後】関連配布資料、テキストP292～299を読むこと(概ね60分)				
14	直接訓練④(交互嚥下 複数回嚥下 息こらえ嚥下)					【事前・事後】関連配布資料、テキストP292～299を読むこと(概ね60分)				
15	直接訓練⑤(増粘剤入水分について)					【事前・事後】関連配布資料、テキストP292～299を読むこと(概ね60分)				

回	授業計画	準備学修
16	直接訓練⑤（嚥下食、段階的摂食訓練）	【事前・事後】関連配布資料、テキストP292～299を読むこと（概ね60分）
17	摂食・嚥下指導①（家族指導 患者・家族に対するカウンセリング）	【事前・事後】関連配布資料を読むこと（概ね60分）
18	摂食・嚥下指導② 高齢者嚥下障害の症状特徴と訓練実施時の注意点	【事前・事後】関連配布資料、テキストP99～104、338～346を読むこと（概ね60分）
19	摂食・嚥下障害の手術（手術式の紹介とその目的、適応）	【事後】配布資料を復習、練習すること（概ね60分）
20	各疾患別対応方法①（脳血管疾患）	【事前・事後】関連配布資料、テキストP67～75、307～316を読むこと（概ね60分）
21	各疾患別対応方法②（神経筋疾患）	【事前・事後】関連配布資料、テキストP76～85、317～328を読むこと（概ね60分）
22	各疾患別対応方法③（器質性疾患）	【事前・事後】関連配布資料、テキストP86～93、329～337を読むこと（概ね60分）
23	各疾患別対応方法④（肺葉症候群、気管切開患者）	【事前・事後】関連配布資料、テキストP130～138を読むこと（概ね60分）
24	吸引について、呼吸リハビリテーションについて	【事後】配布資料を復習、練習すること（概ね60分）
25	症例検討①（脳血管疾患）	【事後】講義内での疑問点を調べておくこと（概ね60分）
26	症例検討②（脳血管疾患） グループディスカッション1	【事後】講義内での疑問点を調べておくこと（概ね60分）
27	症例検討③（脳血管疾患） グループディスカッション2	【事後】講義内での疑問点を調べておくこと（概ね60分）
28	症例検討④（神経筋疾患）	【事後】講義内での疑問点を調べておくこと（概ね60分）
29	症例検討⑤（神経筋疾患） グループディスカッション1	【事後】講義内での疑問点を調べておくこと（概ね60分）
30	症例検討⑥（神経筋疾患） グループディスカッション2	【事後】講義内での疑問点を調べておくこと（概ね60分）
教科書	『標準言語聴覚障害学 摂食嚥下障害学』椎名英貴/倉智雅子編 医学書院 『2026年版言語聴覚士国家試験過去問題3年間の解答と解説』大揚社 2025年7月頃発売予定	
参考文献		
備考	授業内容は状況に応じて変更する場合があります。課題についてのフィードバックは、採点后、口頭や課題上に記載する形で行う。	

※以下は該当者のみ記載する。

実務経験を有する教員による授業科目(実務経験の概要、実務経験と授業科目との関連性)

言語聴覚士として、臨床にて5年以上の経験あり。